
焼きたて工房

ピクト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

焼きたて工房

【Nコード】

N6376C

【作者名】

ピクト

【あらすじ】

主人公あかりは最愛の親友が異母姉妹だったことを知る。これからも異母姉妹の光と仲良くしようと思っていたが、光にはその気なし。それどころか、あかりを嫌うようになった。あかりは光と仲良くしたい。その気持ちは、17歳になっても変わらなかった。

初めて知ったこと

私は6歳まで光のことをただの友達だと思っていました。

母から聞かされた真実は、7歳を迎える私にとって、とても衝撃的なものだったのです。

ハッピーバースデーあかり！

そう書かれた細長い紙は天井に張られていました。

「お母さん…これ…」 「おめでとう！」

今日で 7歳ね！」

私の家は貧乏でもなく金持ちでもなく、普通の一般市民の家。

誕生日を祝ってもらえるのは普通のことでした。

「誕生日プレゼントの前に言わなければいけないことがあるのよ。」

「あかりにはね。妹がいるの。」

何のことが全くわかりませんでした。 「あかりのお父さん、もう、死んじゃって、いないわよね。」

「私の父は私が生まれて4年後、病気で死んでしまったのです。」

「お父さんはね。」

お母さんじゃない、ちがう女の人とずーっと前に結婚して、子供もいたの。

でもお母さんと知り合って、お母さんのことも愛してくれたのよ。

「
その時の私は、それがどういうことかわかりませんでした。

（今考えれば、それは父が母と浮気していたことになる。）

「その子供があか

りの妹なの。でもあかりと同じ7歳だからね。」 「ふ

ん。」

7歳児にこんな難しい説明はありますかと今は思います。

「光ちゃんっていう のよ。」

「…え。」

光は私を通つ

ている

小学校の大的仲良しだったのです。

次の日。私は学校に行きました。

光は、昨日、私と同じように、親から、私と同じことを聞いた
ようでした。

パン！

私は頬を叩かれました。

「…光ちゃん…？」

「知ってるんですよ。」

「え？」

確かに私に妹がいるということは母から聞かされたけれど、頬を叩かれるようなことは、身に覚えがありません。

初めて知ったこと（後書き）

この物語は私の友達の話をアレンジしたものです。私はその友達のことを大好きです。この気持ちを読者の方たちにもわかってもらえたらうれしいですね。

あんななんか大嫌い！

「なんで？」

モヤモヤした空気の中。私はわけがわからずただただつつ立っていました。

「ウザイよ！」

…。今の世の中正直いつてすごいと思う…。

7歳児が『ウザイ』を口にするとは…。

光はそのころの私よりはるかに大人…だったです。

「あんななんか大嫌い！」

そのまま光は去っていった…。

「…？」

私はわけもわからず家に帰りました。

明日も光と仲良く遊べると信じて…。

次の日のことでした。

私はいつもどおり元気に登校しました。

「あーあ。つまんないな。毎日一人で学校に行くの。」

私の家は学校より少し離れているため、一緒に登校する人がいなかったのです。

「…光と…学校行きたいな…。」

始業ベル10分前。

ガラッ…

ザワザワ…

教室内はまだ先生が来ていないのをいいことに、ザワザワしていました。

「光…。おはよ…。」

その瞬間、光は私のことをにらんできました。

「あれ？仲良くしないって言わなかったっけ？」

ほんつつつつつつつとくに怖い顔。

7歳の私は、まだ『怖い』という漢字を知らなかった。
でも無意識的に頭の中で使っていました。

「もう1回言う。

あ・ん・た・な・ん・か・大・嫌・い！！」

私は逃げ出した。

悲しかった訳じゃない。悔しかった訳じゃない。
ただ、あふれてくる塩水を。涙という雫を。
光に見られなくなかった。

ただ……それだけだった……。

今時の若いもん

そのうち私は17歳、高校生になりました。

光とは家が近かったせいか、中学も一緒に…。

涙をこらえることがとてもつらくて…。

小学生のころと比べてかなり変わったと思います。

光は私のことを『あんた』ではなく、『あかり』とよんでくれるようになったのです。

それでも私と仲良くなろうという気持ちにはならないようで…。

そんなことを考えつつ、全速力で走っているのは、遅刻しそうだから。

私は普通の高校生ではありません。

『パン専門学校』ってもんに通っているわけで…。

パン専門学校ってふつーにないよね。それが最近できたところで、普通に道路を歩いていても全っ然わかんない場所にあるんです。

…私、…高校生になってかなり口悪くなったかもです。

…いいよね!! “今時の若いもん” になったんだし。

ガラッ…

「すみません。成田先生！遅れました！」
なりた

「見ての通り一時限目は始まっている。」

教室にいる生徒全員…あつ、全員じゃないな。何人かが忘れているが、ノートが机の上に置かれている。

「ええ。だから遅れましたって言ったじゃないですか。あ。もしかして聞いてなかったんですか？」

沈黙…。

「遅れてきたというのにその態度はなんだーーーー（怒）」

「プッ…。」

私は気づかれぬよう、小さく笑いました。

「ったく…。今時の若いもんは…。」

“今時の若いもん”ってそんなにいけないものですか。

「立ってる。」

ゲ。…っていうか、“廊下に立たされる”ってすごい古いんじゃない？

「ふぁい。」

「んん？」

「ハイ！」

こうして私は廊下に立たされました。

今時の若いもん（後書き）

今回のお話は以前のお話ですより面白くしたつもりです。でもたいして面白くありません（泣）

遅刻した…！

…私は運が悪いです。

廊下には立たされた私はある人物を見つけていました。

「あかり…。」

「ひ…光…。なんで…。」

光がニヤリと笑ったような。

「私、今日からこの学校に通うの。よろしく。」

「な…っ…。」

なにいい〜〜〜〜！？

ガラッ…

「うるさいぞ！まきはら榎原！あ…。ちょうど良かった。榎原、入ってくね。」

「はあい！…！」

「馬鹿！お前じゃない！…」

パタン。

何も『馬鹿』って漢字で言わなくなってる。

しかし、私にとって、光がこの学校に来たことが、大ニュースならぬ大姉妹問題となりそうな気がしていたのです。

「はじめまして。槇原 光です。よろしくお願いします。」

ザワザワ…

「前はどこの学校にいたんですか?！」

「えっと…。東京練馬区東高校です…。」

「すると！ちがっ県からやってきたわけだ!!！」

教室内の声が全て聞こえてくる。

っーかここ東京です。

「しずかにい！授業の続きだ」。質問は後にしろ!!！」

あれから何時間たったのか。

私は廊下に死んだように眠っていたらしいです。

「昨日2時（深夜）に寝たからなあ……。それにしても成田のやつ、
『そんなに寝たかったら廊下で放課後まで寝てろ！』ってどーいう
意味よ。」

私は帰りの道を歩いていました。

「あかりいい……。」

振り返ると親友の伊藤^{いとう} 優花^{ゆうか}が。

「優花……。」

「はい、これ！」

優花に手渡されたものはノート。

「今日ずーっと廊下だったでしょ。」

「優花、最高。」

「あはは。」

「ところでさ……。今日転校してきた“光ちゃん”？なんかさー、
男子にモテモテらしいよ。彼氏が光ちゃんのところ行ったやつたっ

てコもいたし。なんかウザくない？」

「あゝ。やっぱり。」

「やっぱりって…。あかり光ちゃんのこと知ってんの？」

「あたしの妹だもん。」

「うつそゝゝゝん！なんで今まで教えてくんなかったの！？…じやー双子？…だよね！」

「うつん。異母姉妹だから。」

「フクザツ！」

「わかってんなら言っな！」

そして私たちは別れた。

光の目的

「はあ〜。…」

何か目的があつてきたのかなあ。

目的があるとしたらあたししかないよね〜。…」

私は早くも光のことで頭がいっぱいでした。

あたしがパン専門学校に入学したのは光と子供の時に食べたパンが
すごいおいしかったからで…。

光はなんでこの学校に転校してきたんだろ。

あたしと同じ気持ちできた…？…いや、そんなことはないハズ。光
はあたしを嫌ってるんだ。わざわざ同じ学校にくるものか…。

私はぐるぐる考えたけれど、答えは見つかりませんでした。

「光と仲良くしたい…。…」

願いよ、届け！

しゅん…。

「無理かなあ…。」

「あかり。」

肩を『ポン』とたたかれました。

「うわあああツツ！！」

光でした。

「そんな驚くことないでしょ！。オバケじゃないのよ？私は。」

よーし。思いきって聞いてみよう！

「あ…あ…あのさ。この学校に何のためにきたの？」
「何って。そりゃあパンづくり習いにきたんだけど。」

もっともですね。

「うーんと、じゃ、何の目的で？つーか何の狙いで？」

「狙い…？」
「うん。」

「言っているの？」

いや、聞くためにせまっていますから！

「うん。」

「あんたをいじめるためにきた。」

えええええッッ！

「なーんちゃって。」

ウソかよ。

いや！ウソじゃなかったら困るから！つか怖いから！

…私最近ノリ突っ込み多ッッ…いです。

どんだけ~~~~~っって…？

じゃ、いかほど~~~~~っで。

「じゃ、ただパンづくり習いにきたの？」

「うん。」

ホントなのかな…。

ため息

「あー。疲れた」

「ただいま、ニヤモ。」
「ニヤオウ。」

ニヤモとは私が飼っている猫です。

ドサッ

ベッドに横たわる。

こんなヒマな日、彼氏でもいればなあ……。
なんせ、告白されたこともないし。

あ。

告白されたことはありません。小学校6年の時。私は、光の好きな人に告白されたのです。

「それも嫌われてる理由のひとつなんだよな」
あーもうやだッッ！
こんな生活！！

一人暮らしなんてさみしすぎるし…。

「ルームメイトでもいればなあ…。」

「ニャウアウ!！」

「あ!！ゴメン!ニヤモのこと忘れてた。」

にしても寂しいことにはかわりなし。

これじゃ一生ペットが恋人の寂しい人生送っちゃうじゃん!！

恋人……。

恋…。

考えれば、あたし恋したこと…ない。

いつも近くに光がいたから光のことばかりで……。

「はあ…。」

な—んか今日、ため息ばかり…。

…ルームメイト……

ルー……………。

「そっかあ！ルームメイト募集すればいいのかあ！！」

あれえ？そーいえば…

大家

『なお、この部屋は一人暮らし用です。誰かと一緒に住むことはできません。』

「やっぱり無理か…。」

寂しい…寂しすぎる…。

「ンニヤ〜ユ。」

ニヤモ…。

「にゃあにゃあ。」

「ニヤウアウ。」

「にゃおーん。」
「ニャニャー！」

なぜか猫語で話す私。

寂しいよぉ〜……。。

「はぁ（´へ´；）〜…」

いじめ開始

「光。あたしのこと、嫌ってるんじゃないの？」

「はあ？なんでわたしがあかりのこと嫌わなきゃなんないの？」

「…じゃ、仲良くしてくれるの！？」

「あたりまえじゃん。わたしはあかりのこと、大好きだよ。」

やツツツたああ！！！！

嬉しい！光が、あたしと仲良くしてくれる！！

そんなことで頭がいっぱいでした。普通なら、なぜいきなり、と、考えるものなんですけど。

そして光は、私の性格を私以上に理解していました。

私はたぶん、安心すると、相手を信用しきって、たとえいじめられたり、騙されても、相手を裏切ることのできない、そして、それが続いても、自分の中にしまい込んでしまう。簡単に言うと、潔白、誠実、天然、アホなのです。

だから、光はあんな行動に出たのでしょう。

「あかり。一緒に帰ろ！」
「いいよ。」

その時の私は光を信用しきっていました。

「よりたいところがあるんだけど…いい？」
「うん。いいよ。買い物とか？」
「ん…。まあ、そんなところ。」

疑わなかった。

「ちょ…ちょっと、どこまで行くのぉ!？」
「もうちょっと…。」

光はどんどんしげみの中へ…。

つか、ここにこんなところあったの？
ぼろっちいかではないけど…どう見たって空き家とわかる建物が
見えてきた。

光はその中へ入っていく…。

「どうしたの？早く来なよ。」

「え。あたしも行くのお？」

「あたりまえでしょ。ほら、早く。」

私は光に腕をつかまれ、空き家の中に、投げ飛ばされました。

ダァン！

「いつ…たあ…。」

ギィ…

この床はきしむ。

「な…何…？」

「わたし達。友達よね。」

「え！？うん…。」

「友達なら、お願い、聞いてくれるよね。」

「え！？」

よく聞き取れなかった。床にたたきつけられて、背中が凄く痛かったし。

ギィ…ギィ…

「!?!」

なんか、ヤクザっぽい人たちが入ってきた。

「あかりはあゝいじめられても許してくれるよね〜…。」
「な…!?!」

ガタガタツツ

…。
ダレカタスケテ…。

私は眠らされた。

眠気がヤクザに殺された

「イヤアアアー!!」

ハアハア…

ここどこ？

あたしの部屋…！？

「待つて…。あたし確かに空き家にいたハズ。」

記憶がゴツチャゴチャで。

うーんと…

空き家に連れて行かれて、ヤクザに眠らされて、て…て…？

わかんねえよぉー!!

お母さんなら何か知ってる？

とたとたとた…

「お母さん……。」

「あら、あかり。起きたの。」

あら、あかりって、振り向かずに言っなよ。

「あたし……。自分で帰ってきたの？」

「ううん。あんたの友達が、運んできてくれたのよ。」

「友達……!？」

「カワイイ子だったなあ。2つ結びの茶髪の子。」

光ちゃん。

何考えてるんだろ……。

「あ……、もうツツッ!」

考えても仕方ない!ない頭であれこれ考えるな!!
全く……。

次の日……

「おっはよ!あかり。」

「え……?」

結局昨日は眠れずじまいだったなあ。

何も考えてないのに眠れないんだもん。

そんなこんなですっごい眠かった。

「光……」。

「どおしたの？眠いの？」

「……うん。」

「寝てもいいんだよ。あ。なんなら寝させてあげようか？」

「は………！？」

「今日も“あの場所”！いこうよ！-！」

なに言ってるの？

ガラッッッ…

眠気も吹っ飛んだ。

“あのヤクザ”だ！あの時のヤクザたちだ！
何されるんだろ…。

“なんなら寝させてあげようか？”…！

まさか…まさか…！

「あかり。行かないの？行きたくないの？」

そりゃ“逝き”たくはないですッッッ！

「オラ！邪魔だ！どけ！！」

「!?!」

ヤクザたちがこっちにくるううう!!

ヤクザたちが光の後ろにならぶ。

「あかり。行く?」

「…い…行く行く! あつたりまえじゃ…ん…」
即答。

ああ、もう。煮るなり焼くなり勝手にしろ。

「じゃ、放課後ね!?!」

ああ。あたしどうなるんだろ。

母の返答

しかし結局、放課後のアレはパスになった。
何があつたかは知らないけれど。

「ごめんね〜！！友達が風邪ひいちゃってさあ〜…。」
その“友達”というのはあのヤクザのことなのか。
「ううん。全然いいよー。」
全然良かったよー。ホツとしたよー。…これが本音。

「また誘うから！」
…ギャー…ス！
誘わないで！！

そんな会話をキに一日が終わった。

「…お母さん。」
「なあに。」

「前にさ。あたしを運んできてくれた友達、いたでしょ。」
「あー。あの子ねえ。」母は懐かしいといったような顔をする。た
った三日前のことなのに。

「なあに？ケンカでもしたの？」

私は首を横に振った。

「あの子は…光なの。」

母は一瞬目を見開いて驚いた様子を見せたが、ふっ、と笑って、
「そうだったの。」

と、聞き流した。

私はカッ、ツツときた。

「なんでそんなに普通にしていられるの！？あれは光なんだよ！？
どうして…。」

「あかり。」

母は今度はこつちを向いて話始めた。

「あかり。母さんは光ちゃんのことには何も言えないの。」

「あたしが光にいじめられてるっていつても？」

そしてまた『えっ？』という顔ををする。

「だけどもまた…」

「ええ。何も言えないわ。」

「どうして…。」

そんな私の気持ちを悟ってか、

「あのね。母さんは、父さんの愛人だったわけ。正式な夫婦じゃなかったし、光ちゃんのお母さんは父さんの本妻だったから、母さんは光ちゃんには何も言えないの。」

私は泣きそうになった。

「お母さんにとってあたしの存在はそんなもんだ!？」

悲しかった。

お母さんは、お母さんには、わかってほしかった…。

アレンジパン制作コンテスト

冬がやって来た。

雪。地面に落ちてはスーッと消える。

なんだか、…寂しい。

あの日以来、母との会話は切れ、目も合わせてくれない。無理矢理話をしようとすれば、

「じゃあ、なんて言えばいいの！？さつきからあれこれ言ってくるけど、それじゃ、なんて言えばあかりは納得する！？自分ばかり辛い思いをしてるなんて思うんじゃないの！！」

……ギャクギレ。

「はあ…。」

「それでは、各自ちゃんとプリントを見ておくように。」

ハッ。もう授業終わったんだ。『ケーキミックス適合パンの作り方？…やっべ。聞いてなかったし。まあ、後で優花に聞いておきますか。』

ところでプリントには、『アレンジパン制作コンテスト』と、書いてあった。

数日後。

「あかりおめでとう。」

「おめでとう。」

「おめでとう!」

おめでとう、おめでとうと言われたからって、

「ありがとう。」

とは言えない。

それが身に覚えのないことなら、尚更だ。

「あの…何のこと?」

「んも〜!とぼけちゃって〜（笑）」

私は優花に背中をバンバン叩かれ、漫画の如く目が飛び出そうになった。

「…とぼけてないんだけど。」

「え〜ッッ!?この前先生からプリントもらって説明つけたじゃん。…あ。もしかして、寝てた?」

うーん…。どうだろ。

私は記憶をさかのぼってみたが、どこまで行っても、見つからなかった。ていうことは、寝てたか、考え事。まいっか。

「あかり?おーい。あかり?ダメだ。ついに逝っちゃったか。」
逝?

「もー。何のことよう。もったいぶらずに早くいつて〜!」

わざとぶりっコしてみた。

「キーモーイー！あかりが、アレンジパン制作コンテストの出場者
に選ばれたってこと！名誉なことだよ！何せ、学校から3人しか
出ないんだから。」

「…へえ。」

「へえって…。嬉しくないの！？コンテストで優勝したら、ガツコ
の顔だよお！んーと、あとの2人は三年の川柳先輩と、
あの光ちゃんだよ。緊張感ないのかよ。…あ！わかった！妹とバト
ル目前だから、血脇肉踊るってやつツスかあ！？」

「！？」

ひ…光も出るの！？

そのとき私は底知れぬ不安を感じたのです。

うるさい実況（前書き）

今回のあまりストーリー性というか、大きな変わりがありません。おもしろくないかもしれませんが、そのところ、ご了承ください。

うるさい実況

大会当日 - -

「さーあ！はじまりましたあ！アレンジパン制作コンテストお！解説はあのかの有名なパン職人田中太郎さあーん！よろしく願いますねえ！

そして実況はわたくしコyakアガリでございます！！会場ご出席の審査員の皆様よろしく願いますです！

会場に来ていた審査員も、出場者も、田中太郎さんも思ったことだろう。『実況うるさい』と。

しかもコyakアガリとかどんだけ〜な名前なんですか。ていうか、田中太郎って名前もある意味どんだけ〜な名前だけだね。そんなジヨードンはおいとして、
いよいよ始まった。

説明を聞いてなかったから、わからなかったけど、この大会はトーナメント戦で、誰と当たるか、わからない。勝ち進むと、同じ学校の2人が当たることもある。
そんな大会だった。

川柳先輩は第一回戦で敗退。私と光は決勝まで進み、当たってしまった。（準々決勝ぐらいまで進めたらあとはえぬいて、落ちていこうと思ったのに…。）

あくまで“アレンジパン”制作コンテストなので、普通のパンではダメだった。

「さあ！！コンテストはいよいよ終盤に！！」

決勝戦というところまできましたが、今回の対戦は同じ学校からきている2人なのだそうです！！このようなことに関して、どうかわれますか？田中太郎さん。」

「そうですねえ。やはり、おたがいやりにくいのではないのでしょうか。」

それに……」

「さーあ！まもなく始まります！！！どのようなパンを作っていたいただけるのでしょうか！楽しみですね！！」

「……………そうですね。」

決勝戦開始（前書き）

遅くなりましてすみません。

決勝戦開始

張り詰めた空気の中、あかりは冷や汗をかいている。

しかし、一方の光は余裕の笑み。

微妙にコワイ。

あと5分で決勝が始まる。

ここはどうすればいいのか。。。

私が負けるべき？いや、実力で勝てるとか自信はないけど。

ビー。

では、これから、第24回アレンジパン制作コンテスト決勝戦を行います。

選手の方は…

アナウンスが流れる。

やっぱ…。始まった。

どーしょー。

私がオロオロしていると、

「榎原あかりさん。始まりますよ。ステージへでてください。」
「はっ…はいい！」

とりあえずステージへ出る。

神様仏様！私をお助け下さい！！

無宗教なんだけど。

パンのイメージも思いつかない。

負け決定かな…（泣）

なんて自問自答していると、

カーン！

あやややや…。
始まった！

とにかく、パン生地を作ろう。

薄力粉…卵…。あ…あれ？強力粉？

もったいいや！！混ぜ合わせてやる！

強力粉です。

ガチャガチャ…

あ…あれ？

なんかヤバイ形になってますけど。

ちっ！まあいいや。まだ時間あるんだから。

光は…？

チラ

！
？

何あれ！？
スゴッ！

それは見なくてはわからない、エベレストなみのパンだった。

盛り付けも完璧で、誰が見ても綺麗だった。

ナチュラルに苺やラズベリー、など、マジでベリースペシャルと呼ぶのにふさわしかった。

そんな光のに比べれば、私のなんか富士山にもおよばないくらいだ。

「もーいい！作り直し！」

そう言つて、生地をコネコネしていると、あるものが目にとまった。

それは野菜。

あかりの頭の中に次々とイメージが！

見えた！

私はできる！
私はできる！

あかりは燃えていた。

もうすぐ時間が迫っている。。。

優勝者

私が考えたのは…

ザ・人参 & amp・薩摩芋の野菜でヘルシー！健康を考えたおいしいパン〜

です。

めちやくちや長い。

私に名前のセンスは全くない！

いや、なくていいのだ。重要なのは中身なんだから…。

第一に…わたしが目をつけたのが、人参と、薩摩芋の野菜であって、甘いという点。

だから、すり潰して、パン生地に練り込み、まわりに人参から出た汁に砂糖を少々加えたものを流し込み、その上に薩摩芋をふかしたものを小さくして、パラパラとかける…。

見た目どんな感じかは、ご想像にお任せします。

しかし……。これで、本当に光のパンに勝てるのだろうか？

見た目で見れば、光のパンの方が美味しそうだ。

ぐるぐる考えていると、

ピーッ！

試合終了！

「審査員の方々は選手作のパンの方へどうぞ！」

ゾロゾロと審査員がこっちにくる。

あかりか？光か？

審査員たちは、2つのパンをまじまじ観察。

「このパンは何を使って作っただんですか？」

「え？あー…えっと、人参と薩摩芋を使いました。あと、少し薄力粉を混ぜたんですけど…。」

そんな時間は早く過ぎた。

結果

5人の審査員のうち、

あかり…3人

光…2人

「あかりさんの勝ち！」

ワッッ！

パチパチパチパチパチパチパチパチ！

え…？

「なお、優勝賞金として、1000万円を差し上げます!!」

1000万円!?

あかりが目を丸くしていたとき、光は…あかりを睨んでいた。

焼きたて工房

見た目

あかり
光

味

あかり
光

創意工夫

あかり
光

総合

あかり
光

Ⅱ 優勝者

あかり

だった。

その結果に光は納得がなかった。

“見た目は私の方が綺麗なのに……。もちろん味だって私の方が美味しいはず。自分で味見したし。

創意工夫なんて、人参と薩摩芋がなんだっていうの？

私は水から果物の産地まで考えて作ったのに……”

そんなこんなでコンテストは終わった。

ブツブツ……

不機嫌なのは光。

そして後ろから…

「光〜!!」

「あかり…。」

あかりはニコニコ。

それが光は気に入らなくて。

「何？イヤミでもいいにきたの？」

「まさか。」

あかりはゴソゴソとバックから何かを取り出す。

「ハイ。これ。」

あかりが差し出したのは、優勝したパンだった。

「もう、仲直りしようよ。あたしはこのままはやだ。こんな関係、もう終わりにしよう？」

そりゃ、異母姉妹の仲は消えないけど、でも…友達としても、姉妹としても、これからやっていけるよ!!」

光は何か不服そうだったが、

パンを一口。

パク

驚いた。

“私のパンより何百倍も美味しい…。
これなら人参が嫌いな子供でも、気にせず人参を食べることができ
る…。すごい…。人参の味はしないのに…。”

少し黙っていた。

「光？」

「私が負けた理由がわかった。すごいね。あかりは……。」

その後、2人は学校を卒業した。

2年後、1つの小さい、2人の店員と美味しくて見た目も綺麗なパンを作る噂のパン屋さんができるんだけど、それはまた別の話…。

そして、そのパン屋さんの名前は…

『
焼きたて工房
』

というのです。

— e n —

焼きたて工房（後書き）

中途半端な小説でしたが、楽しく読んでいただけたでしょうか。焼きたて工房はこれで終了です。読んでくれたみなさま、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6376c/>

焼きたて工房

2010年10月26日02時59分発行